

マス・メディアの巨人

しょうりき まつたろう

正力 松太郎 (1885-1969)

読売新聞社ほか



§ 人物データファイル

『読売新聞 八十年史』
より

出生

明治18年(1885)4月11日富山県射水郡大門町(現・射水市)に父庄次郎、母きよの次男として生まれる。祖父の代から正力家は土木請負業を始めた。正力家がこの地の名家として名声を得たのは、祖父庄助がこの地に度々災害をもたらした庄川の氾濫を防いだ功績による。庄助の発明した古橋の杭を抜くための道具「鉄の金輪」(「正力輪」と名づけられた)で工事は大いにはかどった。正力の創意工夫は祖父ゆずりである。

生い立ち

明治32年(1899)高岡中学に入学。中学時代のあだ名は、「火消し」「警視総監」。明治37年(1904)金沢の第四高等学校に旧友河合良成(のちの小松製作所社長)と一緒に入学。勉強はあまりしなかったが、柔道には熱中した。また、非常に負けず嫌いであった。明治40年(1907)東京帝国大学独逸法科入学。連日のように講道館に通い、三船久蔵八段(のちに十段となる)の指導をうけて腕をあげた。また、参禅にも精を出した。

実業家以前

明治45年(1912)内閣統計局に入局。統計の組み合わせによって結論を出すことが得意だった。特に、犯罪統計の作成とその結果から引き出す世相の観察に興味を持っていた。同年高等文官試験に合格。大正2年(1913)警視庁に入庁。堀留、神楽坂の署長などを経て、第一方面監察官となった。大正6年(1917)早稲田大学の学園騒動、大正7年(1918)東京市の米騒動を鎮圧し、刑事課長、官房主事、警務部長と恵まれたコースを歩いた。その矢先、大正12年(1923)虎ノ門事件が起きた。難波大助が、

帝国議会開院式へ向かう皇太子（のちの昭和天皇）の御召自動車を狙撃。その責任を問われて懲戒免官となる。ときの山本権兵衛内閣が総辞職。大正13年（1924）皇太子ご成婚の慶事で正力の懲戒免官は解かれたが、官界へ戻ろうとはしなかった。

実業家時代

大正13年（1924）2月、破産寸前の読売新聞の経営を引き受けないかという話が正力に持ち込まれた。友人の後藤窓彦（のちの京成電鉄社長）と河合良成が、番町会の郷誠之助（東京株式取引所理事長）に正力を推薦したのである。官界にいて新聞の影響力を目の当たりにしていた正力は、たちまち乗り気になった。後藤新平（内務大臣兼帝都復興院総裁）から10万円を借り入れ、読売新聞の経営権を買収し、読売新聞社の7代目社長に就任。

正力は、徹底した無駄の排除と経営の合理化を行う一方で、積極的に意表をつく新企画を打ち出した。ラジオの将来性を考え、他紙に先駆けての「ラジオ版」の創設。「囲碁・将棋欄」を拡充し、日本棋院と棋正社の対局を実現し、その棋譜を掲載。日曜夕刊発行。「都内版」の先駆けとして読者の多い江東地区に2ページの「江東版」を創設。事業としては、国技館における納涼博覧会や多摩川園における菊人形の開催などを行った。これらの新企画によって販売部数は飛躍的に伸びていった。

正力は、紙面と大衆社会との直結を考え、大衆が喜ぶものを提供することに心血を注いだ。正力の新聞に対する考えは、「公正中立な言論づくりも使命だが、読者から特に得た利潤を広く大衆に還元すること」であった。

昭和16年（1941）言論統制を容易にするため、全国の新聞社を一つに統合しようとする政府の新聞合同会社案に対して、強硬な反論を唱え、ついにこれを撤回させた。昭和17年（1942）報知新聞社を合併。

戦後昭和20年（1945）読売第一次争議おこる。一方、正力はA級戦犯容疑者に指定され、巣鴨拘置所に収容される。巣鴨拘置所では座禅にあけられた。同年12月、読売新聞社取締役を辞任。翌21年（1946）公職追放される。昭和22年（1947）巣鴨拘置所から釈放されるが、釈放後も公職追放の

ままで、すぐに読売新聞社に復帰する道は絶たれていた。昭和26年（1951）追放解除となり、昭和29年（1954）7月に読売新聞社の社主に推挙され、正式に復帰する。

公職追放中に、正力が取り組むようになったのが、民間テレビ放送である。昭和23年（1948）テレビの話が、友人であり戦前に日産コンツェルンを築いた鮎川義介（のちに参議院議員）を通して正力に持ち込まれた。

正力は、昭和26年（1951）に「日本テレビ放送網設立構想」を発表。この「正力構想」は、一社で日本全国にテレビネットワークを形成することを目的として設立された。昭和27年（1952）日本初のテレビ放送予備免許を取得して「日本テレビ放送網株式会社」を設立し、社長に就任した。昭和28年（1953）初の民間テレビ放送局として開局。

テレビの大衆化のために正力は、「街頭テレビ」の設置に力を入れた。当初、テレビのない家庭がほとんどであったため、東京駅構内や新橋駅西口広場など主要箇所^{あいかわよしすけ}に設置。プロボクシング世界タイトルマッチの中継やプロレスの力道山などの試合を見るために、街頭テレビの前は黒山の人だかりだった。街頭テレビは、テレビ普及に役立った。

その後、郵政省が「NHKは全国、民放は地方」という役割分担を決めたため「正力構想」は頓挫する。しかし、正力は昭和33年（1958）に大阪に読売テレビ放送を開局したのを皮切りに、各県にテレビ局を開局していき、最初の「正力構想」とは違った形になったが、全国テレビ放送網を築き上げていったのである。

政治との関わり

昭和2年（1927）東京市長に立候補するが、落選。

昭和19年（1944）貴族院議員に勅選される。

昭和30年（1955）故郷の富山2区から無所属で出馬、衆議院議員に当選。計5回当選。第3次鳩山一郎内閣では、国務大臣（北海道開発庁長官、原子力担当、のちに原子力委員会の初代委員長、科学技術庁長官）を、つづく第1次岸信介内閣でも国務大臣（国家公安委員会委員長、科学技術庁長官、原子力委員会委員長）を歴任した。昭和41年（1966）東海村の日本原

子力研究所の設立にかかわり、日本の原子力政策を推進した。

社会・文化貢献

昭和6年（1931）と昭和9年（1934）の2度にわたり、アメリカ大リーグ選手を招聘。昭和9年（1934）日本で初のプロ野球球団「大日本東京野球倶楽部（現・読売巨人軍）」を結成し、職業野球（プロ野球）を日本に根付かせた。昭和24年（1949）わが国初のプロ野球コミッショナーに就任。日本野球連盟会長となる。没後、その野球界に対する功績を記念してプロ野球界に貢献した関係者を対象とする「正力松太郎賞」が設けられた。正力の遺訓は、「巨人軍は常に強くあれ」、「巨人軍は常に紳士たれ」、「巨人軍はアメリカ野球に追いつき、そして追い越せ」であった。「プロ野球の父」と称された。

正力は、新聞・テレビ・プロ野球など大衆と向き合って事業を繰り広げていった。大衆娯楽の事業化を図り、大衆の好奇心・夢を見抜く天才でもあった。大衆文化の演出者として立ち振る舞い、その事業の成果が大衆文化に与えた影響は絶大である。

晩年

昭和44年（1969）10月9日熱海市の国立熱海病院で冠不全（冠状動脈の機能不全）のため死去。くしくもこの日は読売巨人軍が5年連続セ・リーグの優勝を決めた日であった。11月14日、日本武道館で読売新聞社・日本テレビ放送網・よみうりランドの3社合同社葬。享年84歳。正力家の墓所のある神奈川県鎌倉市円覚寺に葬られた。

関係人物

後藤新平 後藤とは、不思議な縁がある。正力は警視庁の官房主事時代、後藤のことを「大風呂敷をひろげて誠意のない人」だと考えていた。内務大臣だった後藤のもとで政界工作をすることを嫌って転出希望を出したがらいである。だが、後藤と接触する機会がふえるにつれ、噂に聞いた人となりとは違うことがわかり後藤の雄大な着想や計画に圧倒され、敬服するようになっていったのである。

徳富蘇峰 新聞人・歴史家。正力が「徳富蘇峯翁彰得会」の理事長として書いた「蘇峯記念館」の看板は、今も二宮町の「徳富蘇峯記念館」に掲げられている（彰得会と看板は「峯」の字を使用）。また、記念館には正力の書簡も保存されている。蘇峯の正力評は、正力の人とその事業をよく物語っているのでここに引用する。「君ハ常ニ他社ニ先ジテ之ヲ成ス、而シテ他人之ヲ笑イ、之ヲ諷ル。ヤガテハ之ニ追隨ス。我ヨリ古ヲ為スモノニ幾シ」。

エピソード

読売新聞の経営権を買収するためには、10万円が必要だった。正力は後藤新平を伊豆長岡の別荘に訪ね、10万円の金策を申し入れると「よろしい」とあっさり承諾してくれた。そして「新聞経営は難しいと聞いているから、失敗したらきれいに捨てて未練を残すなよ。金は返す必要はないからな」と言った。このとき後藤は、麻布に持っていた5千坪の土地を担保に10万円を工面したのだが、出所は言わなかった。没後、遺族から事情を知らされた正力は、13回忌にあたる昭和16年（1941）、後藤の郷里である岩手県水沢町（現・水沢市）に20万円の「後藤新平伯記念公民館」を建てて故人の恩に報いた。

キーワード

天覧試合 街頭テレビ時代から、テレビは数々のスターを送り出してきた。プロレスの力道山やプロ野球・巨人軍の長嶋茂雄など。昭和34年（1959）の天覧試合はその頂点と言える。阪神との一戦で長嶋は劇的なサヨナラホームランを打ち、試合に決着をつけた。

虎ノ門事件で警察官僚の道を断たれて以来、新聞・野球・テレビと突き進んできた正力は、その日、かつての皇太子である昭和天皇を後樂園球場に迎えた。その時、虎ノ門事件を思い出し、万感の思いであったことが推察される。

神奈川との関わり

昭和24年（1949）川崎競馬倶楽部（のちの「よみうりランド」）設立。会長に就任。ゴルフの大衆化を目指し、家族みんなで楽しめる大レクリ

ーションセンターを建設した。

晩年は、プロ・サッカーをめざす「読売サッカークラブ」の創設と「よみうりランド」のサッカー場建設に関わった。

自宅は逗子にあった。敷地は4百坪弱。病弱だった波満^{はま}夫人のため昭和6年(1931)に東京三田から転居。門をはいってすぐ左手に「不老門」と彫った石碑を置いた。武道にいそしみ、武道館建設を生涯の夢とした正力の「我は老いず」という心意気が感じられる。

§ 文献案内

著作

「読賣を築き上げるまで」正力松太郎著 日本評論 11(1) 1936
p565-570 (Y)

「善因善果」正力松太郎[述] 『私の哲学 続』思想の科学研究会編
中央公論社 1950 p111-116 (Y)

『悪戦苦闘』正力松太郎著 大宅壮一編 早川書房 1952 (Y)

『私の悲願』正力松太郎著 オリオン社 1965 (未所蔵)

社史

『読賣新聞 八十年史』読売新聞社編 読売新聞社 1955 (Y、K)

明治7年(1874)から昭和29年(1954)までの読売新聞社の歴史を収録している。社主として正力は序文で以下のように述べている。「読売成功の原因はつぎの三点に帰すると思います。『社員と販売店が一体となって一生懸命に働いたこと』、『新聞紙面および宣伝事業において常にぎん新なる計画が企てられ、幸いにもほとんどことごとく大衆に受け入れられたこと。』、『社内における不正の徹底的追求とムダを極力排除したこと。』」

『読売新聞 百年史』読売新聞社編 読売新聞社 1976 (Y、K)

創刊号以来の読売新聞紙面を基礎資料として、昭和50年(1975)までを記述の範囲としている。エピソード・写真・当時の社会情勢も記載。

なお、本稿・人物データファイルの記述は本書を主な典拠としている。

『読売新聞 百年史 資料・年表』読売新聞社編 読売新聞社 1976
〈Y、K〉

『百年史』以降の社史には関連会社として「読売巨人軍」「よみうりランド」「日本テレビ」などの歴史を収録。

『読売新聞発展史』読売新聞社編 読売新聞社 1987 〈Y、K〉

社史の節目ではないが、社業遂行と社員研修を目的に発行。『百年史』刊行以降の10年間を詳しく編集している。索引と年表あり。

『読売新聞 百二十年史』読売新聞社編 読売新聞社 1994 〈Y、K〉

本編と資料編の2部構成。平成6年(1994)までの読売新聞社の歴史を収録している。関連会社として「ヴェルディ」が加わった。巻末には年表・索引あり。

『大衆とともに25年 沿革史』日本テレビ放送網株式会社社史編纂室編
日本テレビ放送網 1978 〈Y、K〉

『大衆とともに25年 写真集』日本テレビ放送網株式会社社史編纂室編
日本テレビ放送網 1978 〈Y、K〉

『よみうりテレビの20年 写真と証言』よみうりテレビ開局20周年記念事業企画委員会編 読売テレビ放送 1979 〈Y、K〉

『読売巨人軍75年史 1934～2009』読売巨人軍75年史編纂委員会編 読売巨人軍 2010 〈Y〉

『読売巨人軍75年史 資料編』読売巨人軍75年史編纂委員会編 読売巨人軍 2010 〈Y〉

『よみうりランド レジャーとともに40年』よみうりランド社史編纂委員会編 よみうりランド 1989 〈Y、Yかな、K〉

『クラブサッカーの始祖鳥』読売サッカークラブ～東京ヴェルディ40周年記念誌発行委員会制作 東京ヴェルディ1969フットボールクラブ 2010
〈Y〉

伝記文献

『正力松太郎と小林一三』天草平八郎著 森田書房 1935 〈未所蔵〉

- 「正力松太郎と讀賣新聞」赤井清一著 經濟往来 10 (3) 1935
p302-311 〈Y〉
- 『伝記正力松太郎』御手洗辰雄著 大日本雄弁会講談社 1955 〈Y、K〉
- 「正力松太郎」高木教典著 『20世紀を動かした人々15 マスメディアの先駆者』講談社 1963 p343-424 〈Y〉
- 『創意の人 正力松太郎言行録』片柳忠男著 オリオン座 1964 〈K〉
昭和36年に刊行された『創意の人 正力松太郎』（オリオン座〈K〉）を増補した内容となっている。
- 『正力松太郎』読売新聞社編 読売新聞社 1971 〈Y、K〉
正力の没後刊行された追想集。大衆とともに歩んだ正力の84年間のアルバム。正力の生涯がそのまま昭和の新聞・テレビ・娯楽などの歴史の1ページとなっている。また生前の正力を知る人びとが、正力との思い出を語っている。巻末に年譜あり。付録として「語る正力松太郎」のソノシートが1枚付いている。
- 「正力松太郎」牛山純一著 『言論は日本を動かす7』講談社 1985
p181-216 〈Y〉
- 「正力松太郎」有山輝夫著 『近代日本のジャーナリスト』田中浩編
御茶の水書房 1987 p1065-1081 〈Y〉
- 「正力松太郎」本田靖春著 『人物昭和史』筑摩書房 1989 p295-329 〈Y〉
- 『巨怪伝 正力松太郎と影武者たちの一世紀』佐野眞一著 文藝春秋
1994 〈未所蔵〉
- 「正力松太郎 読売新聞・日本テレビの総師」井川充雄著 『近代日本メディア人物誌 創始者・経営者編』土屋礼子編著 ミネルヴァ書房
2009 p225-234 〈Y、K〉

¶ 参考文献

- 『野球と正力』室伏高信著 講談社 1958 〈Y〉
- 『昭和史の家』垂見健吾・写真 半藤一利・文 文藝春秋 1989 〈K〉
- 『「日本テレビ放送網構想」と正力松太郎』神末一三著 三重大学出版
会 2005 〈未所蔵〉

『日本テレビとCIA 発掘された「正力ファイル」』有馬哲夫著 新潮社 2006 (Y)

『原発・正力・CIA 機密文書で読む昭和裏面史』有馬哲夫著 新潮社 2008 (未所蔵)

<高田泰子>

コラム 映像化された実業家たち

実業家を描いたドラマ・映画といえば、いちばん近いところでは平成 23 年 (2011) 10 月に放映されたばかりのNHK土曜ドラマ「神様の女房」を思い出される人も多いだろう。松下電器 (現・パナソニック) 創業者・松下幸之助の妻むめのを主人公にしたもので、原作は松下家の執事を長年勤めていたという高橋誠之助、主人公むめのを常盤貴子、幸之助を筒井道隆が演じていた。この筒井の幸之助については、「耳の大きさがポイントなのでは? (実際の幸之助の写真を見るとたしかに耳が大きい)」という冗談もあったようだが、真相やいかに。映画「陽はまた昇る」(2002) では仲代達矢が、映画「破天荒力 A Miracle of Hakone」(2008) では宝田明がそれぞれ演じているが、いずれも筒井ほど耳は目立たないようだ。

NHK大河ドラマ「春の波濤」(昭和 60 年・1985) は、日本最初の女優・川上貞奴を主人公にした群像劇だったが、風間杜夫扮する福沢桃介がかっこよくて、これを見て桃介を知ったという人もいた。もう一人、かっこいいといえば白洲次郎。当人の写真も良いが、平成 21 年 (2009) のNHKドラマ「白洲次郎」で演じた伊勢谷友介もかっこよかった。このとき妻の白洲正子を演じたのは、中谷美紀だった。

渋沢栄一は、明治実業界の大家なのでいろいろな場面に登場しており、さまざまな“渋沢”がいる。主人公としては、昭和 53 年 (1978) TBS時代劇「雲を翔びこせ」で西田敏行が、昭和 57 年 (1982) NHK正月ドラマ

「雄気堂々」(城山三郎の同名小説が原作)で滝田栄が演じ、脇役としては昭和55年(1980)のNHK大河ドラマ「獅子の時代」で角野卓造が、高峰譲吉が主人公の「さくら さくら」(2010)と続編「TAKAMINE」(2011)という映画では松方弘樹が演じている。見比べてみるのもたのしいかもしれない。

ちなみに、この「さくら さくら」「TAKAMINE」をつくった市川徹監督は、これまでに浅野総一郎を主人公にした「九転十起の男」3部作(2006~2007)や、同じく浅野を中心に明治期の横浜を描いた「弁天通りの人々」(2009)、山口仙之助を取り上げた「破天荒力 A Miracle of Hakone」と、「実業家伝記映画」ともいべきものを次々と制作されている人である。県立川崎図書館にも何度かお越しいただき、上映会で話していただいたこともある。

実名ではないが、「モデルにした」と言われるものもいくつかある。たとえば、平成15年(2003)のNHK朝の連続テレビ小説「てるてる家族」に出てきた近所の発明家おじさん。この中村梅雀扮する安西千吉という人物のモデルは、“インスタントラーメンの父”日清食品の安藤百福といわれている。また、「コクリコ坂から」というジブリのアニメ映画(2011)の、主人公たちが通う高校の理事長・徳丸社長は、徳間書店の創業者・徳間康快をモデルにしていると、パンフレットに書いてあった。

さて、古いところでは——何人かがあげた作品は、「パンとあこがれ」というドラマ。中村屋の相馬愛蔵・黒光夫妻を主人公にした、昭和43年(1968)放映のTBS昼の連続ドラマで、脚本は山田太一、黒光役は宇津宮雅代、愛蔵役は東野孝彦だったそうだ。どんなにか印象の強いドラマだったことだろう。

実は「実業家の登場するドラマ・映画」については、今のところまとまった情報がない。それで今回は、いろいろな人の記憶やインターネット上の断片的な情報をつなぎあわせてこんなふうにとまとめた。いずれきちんと調べてみるのもおもしろいのではないだろうか。